

メディアと中国

海老名敏宏

一九七一 私たちは何を伝えたか

今から三五年前の一九七一年、名古屋で開催された世界卓球選手権にペールで包まれた中国選手団が参加した。いわゆる「ピンボン外交」が生まれた大会である。荘則棟選手を中心にした中国選手団は当時から世界トップレベルの強豪チームと知られていたが、世界の表舞台に出ることは少なかった。それは中国と国交を持っていた国々が社会主義国家に限られ、いわば東西冷戦時代の渦中だったからである。戦後、中国は毛沢東の指導による中国革命によって独立したのち朝鮮戦争でアメリカと対峙した。西側諸国にとっては独自の政治体制を歩む東側諸国を理解

することはイデオロギーを理解しなければならぬことであり、人民一人ひとりを理解することではなかった。そんな時代があった。

名古屋を舞台にしたこのピンボン外交はさまざまなハブニング（あるいは仕掛けたという説もあるが）が重なり、アメリカと中国が急接近するきっかけが生まれた。そんな中で日本は翌年の一九七二年、中国との国交回復を実現させた。

当時中国が国外向けに発行していた『中国画報』には躍動する中国人民の一致団結する姿が彩られていた。そこには富みもないが貧しさもない、共通する理念の下に理想の国家を目指す中国人民の姿があり、当時大学生の私は誰もがそうであった

ように、インテリかぶれしながら（中国画報の購読を熱心に勧めたのも実はゼミの教授であった）マルクスの世界観を具現化した国家体制に好奇心を抱いていた。

私が入社する前の当社（名古屋テレビ）では、当時民放としては画期的な中国報道に取り組んでいた。ピンボン外交をきっかけに取材を進めていた当社に中国外交部が中国国内の取材許可を出したのである。取材を実現するためにはさまざまなネットワーク（国内には中国大使館などの正式窓口がまだなかった）を駆使したことはいうまでもない。

当時の映像をあらためて見る機会があった。

革命を支えた人民解放軍。大地に刻まれた日本軍による虐殺の証。理想の生産経済活動を実現した人民公社、資源豊かな鉱山。人民のために下放先で汗を流す若き革命の戦士たち。はだしの医者とすぐれた漢方医療技術。中国人民であったことを喜

ぶ人たち。笑顔いっぱいの子どもたち。中国の革命を称える多くの民衆の映像と毛主席の偉大さを語る人々があった。カメラを、そして取材を意識して中国側が組み立てた姿があったことはいうまでもない。

そして取材に当たった先輩たちの話を聞くことになった。ペールに包まれた中国の大地に立って、ペールの内側を自分の目で確かめたい。そして記録したい。手段は問わない。ジャーナリストなら誰もが思い描く憧れに嬉々として取り組むチームの姿があった。金もかかる。スタッフにも余裕があったわけではないが、いくつもの取材チームが編成された。それは日中国交回復をきっかけに一〇年も続くことになった。

しかし、それは正しく中国を報道したかという点、疑問を持ったことも伺えて当然である。日本のテレビメディアが中国のプロパガンダに利用された認識もなかったわけではない。そうしなければ、中国国内の取

材などかなわなかったことも。しかし、取材班がしだいに中国に傾倒していったことは、取材テープのメモや後に出版された本や周年特集にまとめられた杜史に刻まれてあった。いまさらそれを取り上げてメディアのあり方を自己批判するつもりはない。なぜなら、私もその時代に同じ取材班に身を置いていけば、きつとそうなっていくに違いないと確信するからである。それだけ、中国は中国であるだけで私たちを惹きつけるものがあつた。

中国取材の難しさ

私がテレビメディアの世界に身を置いて三〇年になる。その間、様々なテーマで何度も中国を取材してきた。最初に中国を取材してから二五年、加速度的に変貌していく中国の姿を継続して見ていく機会に恵まれた。

中国での取材は、申請や、金銭の面でも多大なエネルギーを要した

(現在もそうではある)。

どこでも、誰でも自由に撮影できるわけではない。どんなテーマでも何を撮影するのか事前に許可をもらわなくてはいけない。さらに手続きが煩雑である。ご機嫌を伺いながら根気良く交渉をし、受け入れ窓口を設定して外交部の判断を仰ぐのである。時の日中の政治的な背景も重要である。特に靖国参拝や教科書問題など歴史認識について軋轢が事象として生まれれば取材ビザも出ないことがある。外事処の担当者が通訳として取材現場に同行し、中国のイメージを損ねる取材はしていないか眼を光らせる。

中国政府にとってメディアはプロパガンダの手段という見方もあり、権力の体制をメディアが批判することとは、許されないという概念があつた。それを海外のメディアにも通用させていた。

取材にも改革開放の波が

しかし、最近事情は大きく変わってきた。提携先の電視台やコーディネーターを通して取材先のリサーチや便宜を図ってもらい、本音で語り合える場も多くなった（限度はあるが）。

取材現場に外事処の担当者が必ず同行することもなくなった。小型で高精度のカメラが生まれ、メディア以外の人が自由にカメラを操り旅行者となつて記録を撮っている。たまにまぎれて、メディアの人間もビザを持たずに取材活動していることも否定はしない。何より、中国の民衆はテレビ取材をそれほど珍しいとも思わなくなっている。かつてはカメラの三脚を立てただけで大勢の人々に取り巻かれた時代とは隔世の感がある。

考えてみれば、最近のテレビ放送受信は衛星を通して巨大なパラボラアンテナで世界中の国際放送を見る

ことが可能になっている。中国でもどんなに秘境といわれる地域でもNHKの国際放送が見られる（日本で中国のテレビ番組を見る技術やチャネルはあつても視聴する人は少ない）。中国国内でメディアを制限しても情報通信技術は成長を続け国境を取り払っていく。インターネットがメディアを「大衆」から「個」への情報ツールへと変えていった。どんなに権力が情報を遮断しようと試みても、所詮ITの流れを止めることはできない。

最近、中国の外事処の担当者からこんなことを聞いた。

「海老名さん、今の中国では取材できないというテーマはもうありませんよ。外交部では海外のメディアに取材の制限を加えるのをやめよう、という方針がでたのですから」
私は、それをまともに信じているわけでもない。現に、今交渉中のチベット取材が暗礁に乗り上げているではないか。二年前雲南省の秘境の

里に暮らす少数民族の貧しく学校に通えない子どもを撮影したいと、撮影台本に書いて申請したら、それだけで企画そのものを却下したではないか。「今中国ではどんな場所にも教育が行き届いて、文盲の子どもたちはいないので」と建前を語ったその担当者。取材先で物乞いする子どもたちに囲まれた取材班を見ながら悲しい顔をしていたのを忘れなかつた。でも私は見てしまった。

止められない時代の動き

中国の改革開放政策は人民の生き方や考え方にも大きく影響を及ぼしているようだ。

今年、取材交渉とロケハンで雲南省に行つたときである。私たちを日本のテレビメディアの人間だと聞いた地元の人政府の役人や出版社の編集長、万戸の企業家などが「私たちにできることはないか」と声をかけてくれた。取材先の地域が紹介

され、有名になり、観光客がたくさん来てくれれば、という思いも伝わって、実に熱心である。あるとき、偶然に近くのチベット仏教の聖地に偉大な活仏が来ているから是非会わせたいと、強引に私たちを山の頂上にある寺に引っ張っていく。「ミヤンマーから来た目の不自由な子供の頭をなでただけで、どの医者も見放した子どもの目を治してしまった」など、いかに偉大な活仏かという話を熱心に語る彼らは、その出来事を本当に信じているようだ（本当かもしれないが）。さらに二五年間も水しか飲まずに修行を続ける仙人も一緒だという。私たちがこれから取材しようと考えているテーマからかけ離れてはいるが、ま、いいか、という思いでついていく。活仏や仙人？に頭をひれ伏し祈りはじめる中国の雑誌編集長や役人や万戸たち。中国では宗教が勢い良く復活を始め

た。
文革時代、宗教が否定され貴重な

文化財の遺跡とともに破壊されたことがあった。豊かさを手に入れ、もつと幸せを、心の豊かさを求める人々がいる。宗教の持つ神秘性に免疫力のなかった人たちが、奇跡を聞いただけですが、っていく姿が確かにある。俗世を避け、一人水だけで修行を続けているはずの仙人の手に、携帯電話が隠されていたのを、私たちは見逃さなかった。パソコンを操ってメールをしている仙人がいてもう驚きはしない。

活仏が私のたれた目を見ながら「日本人は戦争時代に多くの中国人を殺したという怖い人を想像していたが、優しい目をした日本人もいるんですね」と語りかけてくれた。

これからの日中友好の残された課題は、政治体制の違いより、ナショナリズムの発想より、多くの情報を民衆のレベルで感動として共有すること、お互いを理解していくことにかかると思う。すぐれた中国の映画、すばらしい民族音楽を日本人の

どれほどが興味をもっていることだろう。中国の人々が、日本のポップス音楽や映画、テレビ番組に興味を抱くように、文化の交流も大きな鍵となるだろう。「政冷経熱」という日中の関係だが、そこに文化的な民間の交流が進められることで、お互いの文化や民族を理解し合えることにもなるだろう。またこれからのメディアの役割は大衆を操作することより、政府のプロパガンダに利用されることより、無名の「個」が発信することができる情報を正しく共有していくことが可能な時代になって、「個」と「個」の心の交流が実現していくことだろう。世界を飛び交う情報化の流れをもう誰にも止めることはできないのだから。

(名古屋テレビ報道局プロデューサー)